

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい

- 1 ゲームをゾツコウする。
- 2 ジキユウ走に出場する。
- 3 先生と親がとメンダンしている。
- 4 自分自身の力をジフする。
- 5 新しい仕事に就く。
- 6 取捨選択をする。
- 7 預金通帳を管理する。
- 8 物が乱雑に置かれている。

問二 次の四字熟語の空欄に入る漢字をあとのア〜クから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 朝□暮改 2 大器□成
- 3 □越同舟 4 温□知新
- 5 無我□中

ア	呉	イ	礼	ウ	故	エ	霧	オ	令
カ	夢	キ	御	ク	晚				

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ヘイランは世界の歴史の中でも最も古く商業の発達した土地のひとつです。長い時間をかけて、人びとは物を売ったり買ったりすることを単なる経済行為から、ひとつの文化的な芸にまで向上させていきました。

もしもその骨董屋であなたが涙壺を買おうと思うなら、まず、少なくともまる一日は時間をとってください。それができなければ、お昼から夕方までの四、五時間を用意していただきたいものです。そして、買おうと思うものについてのきちんとした予備知識を持つてください。服装をととのえ、ひげを剃り、そして好奇心に満ちた、いきいきした気持ちでお店にはいってゆくのです。

店では、まず淡々とした表情で店内を一周する。老いた店主がぶ厚い眼鏡の奥から、さりげないそぶりであなたを観察しているでしょう。ここでは両者が海面下で静かなエールの交換を行っているのです。目ざす涙壺があっても、その壺にはいきなり手を出したりせず、ほかのものを①タンネンに見ましよう。

そのあとで店主のところへ行き、今日の午前中は涼しかったけれども午後はひとしおの暑さですとか、この土地は初めてですが、この店の名前の由来はなんですかとか、おだやかに話しかけてください。店主は丁重にあなたの質問に答えてくれるでしょう。やがて、きつとガラスの容器にはいった熱い紅茶をすすめてくれるはずで、皿に盛られた角砂糖は紅茶の中へ入れてはいけません。その岩塩のような砂糖の塊を口の中に入れ、舌先でころころと巧みにころがしながら紅茶を一口すすります。口の中の砂糖がちょうど溶けおわるころにガラスの紅茶が空になれば上々です。

さて、そこから涙壺を指さしてその由来をたずねましょう。店主はその壺を運んできて、いろいろと説明をしてくれるはずで、あなたはそのれに対してローマン・ガラスの起源から現代のガラスまで、自分がガラスについての知識と興味を持っていることを言葉少なに相手につたえましょう。それからしばらく両者は店頭の考古学者になるのです。値段の交渉にはいったときから今度は②になりす。

しかし、セイキウウに値切ってはいけません。ゆっくりゆっくり値切りながら、またあいだに休息の紅茶がはいり、そしてさらに、値段が折りあわないときには、あなたは礼を言っておきらめるそぶりをし、店を出ようとします。老店主は、まこと残念だ、といった表情で別れの挨拶

をします。そのへんでは今度はふたりは **口** になっているのです。あなたが立ち去るのを、一瞬、店主があらためて引き止めます。これも演技のうちです。

そして今度は **目** と判事のようなやりとりがはじまります。そのへんまでくると涙壺の値段は、おそらく最初の半分以下にさがっていることでしょう。また紅茶が出ます。紅茶を飲んでよもやまばなしをし、ふたたび涙壺の話にもどる。そんなふうにして、古都の午後は静かにすぎてゆくのです。

やがて、最初の四分の一くらいの値段で話がまとまり、老店主は古い新聞紙に涙壺を包んで、あなたに手渡します。そしてお互いに抱き合っ
て熱いキスを交わし、今日一日の午後が実り多いものであったことを確認しながら、二人はやがてそれぞれ別れるのです。

客を送り出したあとで老店主は心からアラアーの神に感謝するにちがいありません。彼はきょう一日を商人としてじつに実り多い有意義な時間として過ごしたのですから。

ある時は俳優となり、ある時は学者となり、ある時は弁護士となり、そしてある時はビジネスマンとなり、さまざまな人生の役割を、物を売り
買いするというたったひとつの舞台上で演じきった満足感は、たとえようもないはずです。彼はその晩、商人としての自分の人生に誇りと喜び
を抱きながら安らかな眠りにつくことでしょう。生きるために商売はしているのだが、商売をするために生きているのではない、というのがき
つとその老人の心の中にある気持ちなのではないでしょうか。

今度、イランのバザールで絨毯をお買いになるときには、どうぞ、物を売ったり買ったりするというだけのことではなく、この国に伝わる
「買う」という文化の精髓を充分お楽しみになってください。それが私の心からお願ひすることです。

K氏はそんなふうによくに教えてくれました。ぼくは大いに考えさせられました。たしかにその通りです。高い値段でいきなり物を買ひ、そ
そくさと出て行く日本人の客に、店主は限りなく失望したにちがいありません。たとえ思いがけない儲けがあったとしても、その商売は彼の人
生に付け加えるものはまったくないのですから。

ぼくはKさんの言葉に、大事なことをあらためて教えられたような気がしたものでした。もちろん、このあわただしい現代の暮らしの中でそ
んな。ペルシヤの古い街の骨董屋のような物の買い方ができるわけはありません。言葉の壁もありません。時間の枠もありません。しかし、気持ちの

中でそれを理解しているだけでも、かなりちがうのではないかと思います。

ぼくらは物を買うことを心から楽しまなければ損をします。お金を損するのではなく、心を損するのです。そして、日本のいろんなお店にできたならば買い物の達人に見あうような売り手の達人がいてくれたらどんなにいいだろうと、ふと考えてしまうのです。今の私たちの周りには、そんな売り手の達人は数多くいません。プロとしての心構えすら持っていない売り手もいるのです。

私たちは必要なものを買ひ、また必要でないものも買ひます。役に立つものを買ひ、役に立たないものも買ひます。成功する買ひ方もあり、大半は失敗をします。でも、そうやって物を買ひうという行為を積み重ねてゆく中で、少しずつ何かを学んでいるのではないのでしょうか。その日、あまりに無秩序な、あまりにも物の積み重なった部屋を呆然と見まわしながら、ぼくはそんなことを考えていたのです。

(五木寛之「生きるヒント 1」より)

問一 線①～③のカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 本文中の^①もしもを使って、単文を作りなさい。ただし、文中には主語と述語を必ず書きなさい。

問三 空欄^①に^②にあてはまる言葉として最も適切なものを、あとの^③ア～カからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 俳優 イ スポーツ選手 ウ 学者 エ 弁護士 オ 生徒 カ ビジネスマン

問四 線A「まず、少なくともまる一日は時間をとってください」とあるが、午前中は何をしたらよいと考えられるか。本文中の言葉を使って、五十字以内で説明しなさい。

問五 線B「老いた店主」は取引のあとで、最後にはどのような気持ちになったのか。解答欄に合うように三十五字でぬき出しなさい。

三十五字

という気持ち。

問六 — 線C「このあわただしい現代の暮らしの中でそんなペルシャの古い街の骨董屋のような物の買い方ができるわけはありません」とあるが、それはなぜか。最も適切なものをあとのA〜Eから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの人が役に立たないモノを買ってしまい、もう二度と買いたいと思わなくなってしまったから。
- イ 現在では、ネットショッピングが多く、イランの骨董屋のようなお店そのものを見つけられないから。
- ウ ささまざまなモノにあふれている現在では、自分が欲しいモノを考えることができないから。
- エ ものを買うために、値段の交渉をしながら店員とゆつくりと話しながら紅茶を飲む時間の余裕がないから。

問七 — 線D「売り手の達人」とはどのような売り手のことか、適切なものをあとのA〜Eから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 話がうまく、巧みに商品が高い値段で売りつけて利益を上げる売り手。
- イ 商品についての知識が豊富で、客とうまくコミュニケーションをとりながら販売する売り手。
- ウ 客との信頼関係をつくりあげ、一度の取引だけでなく、長い付き合いを続けてゆく売り手。
- エ 客を長く引き止めて、必要でないものまで、できるだけ多くの商品を販売する売り手。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

サクラの花びらは一組の教室にもまいこみ、この教室でもやはり六年生の心がまえ^Aを先生が話していた。

三宮先生——新しくこの学校にきた先生だ。

「ぼくはサンノミヤだが、ぼくの姓^{せい}から一ひいた^B二宮金次郎^{にのみやきんじろう}って人のこと知ってるかい？」

と、三宮先生はみんなを見まわした。四、五人、手をあげる。先生はミドリにあてた。

「二宮金次郎はせなかにたきぎをせおって、歩きながら本を読んだ人です」

みんなが笑う。

「その話をだれからきいた。 一 本で読んだのかね？」

「おとうさんにききました。おとうさんが子どものとき、金次郎の銅像が校門のすぐそばにあったそうです」

「 二、その金次郎のことをどう思う。そら、きみ」

さされたビデオはどきまぎしたようにいった。

「あの、そんなことしたら近眼^{きんがん}になると思います」

またみんなが笑った。先生も笑いながらいった。

「そうかもしれない。 三、そんなにしてまで金次郎は勉強^{べんきょう}したかったんだ。これはきみたちにもわかるだろう。どうだ、きみ」

——ちえつ、だからきみたちも金次郎のように勉強しろというんだろ。と、タケシは外をむいたが、先生のつぎのことばはちがっていた。

「なぜ金次郎がそんなに勉強したかったかということのわけだが、これには二つの理由がある」

先生はそういって、黒板に二つのことばを書いた。

知識欲^{ちしきよく}

立身出世^{りつしんしゅつせ}

「チシキヨクとリッシンシュッセ、この二つだ。チシキヨクというのは、いろんな知識を、得たいということだ。人間ならだれでも何かもつとよけいに知りたいという気持を持っている。この知識欲のものは好奇心だ。何でも見たい、知りたい、たしかめたい。だから、コロンブスはそのころだれも知らなかった西の海にむかって船出した」

みんなだまって先生の話をきいている。

「立身出世というのは、人間というものはだれでもらくな生活をしたい、人にみとめられたいという気持を持っている。ところが、金次郎の時代、農民は生活していくのにせいっぱいだ。金次郎はもつとましな生活をしようと思ったんだ。そのためには勉強しなければならぬ。何にも知らないでは出世することはできないんだ」

黒板にちがうことばが書きくわえられた。

知識欲 — 好奇心

立身出世 () (X)
(Y) ()

「だが、ぼくは二宮金次郎はきらいだよ。金次郎はなかまの農民たちがもつとましな生活をしたと思うことを考えないで、**ニ**ケンヤクケンヤクとばかりいったんだ。あの男は世の中のためにはあまりやくにたたなかつた男だ」

教室はざわついてきた。話はなんだかむずかしいし、二宮金次郎はむかしの人だ。あまり自分たちとは関係がない。先生はいった。

「この一年間、ぼくはきみたちじつくり考えてもらいたい。自分はなぜ勉強するかということだ。これがこの一年間の宿題だ。卒業するとき、ひとりひとりに書いてもらおう」

「うわあ」と、声があがり、アキコはくびをすくめた。もし宿題ひきうけ株式会社があつたら、この宿題にどのような答を出すだろうか、と思つたのだ。

D それから二、三日のちの放課後、アキコとタケシとヨシヒロは運動場のサクラの木の下に立っていた。

「このサクラの花、遠くから見ると、ほんとうに花の雲②という感じなのね」

アキコがいうと、タケシが笑った。

「サクラよりサクラランボの方がずっといいんだよ。この木にはちっちゃな、まずいサクラランボしかないんだ」

タケシはざんねんそうに花のこずえを見あげた。

「ぼくが校長先生だったら、学校じゅうの木をぜんぶ、くだものなる木にうえかえてやるんだ。ナシにリンゴにミカンに」

「バナナ、パイナップル、ヤシの木」

ヨシヒロがそばからませかえす。③

——タケシ君、また元気になってきたわ。

アキコはうれしい。宿題ひきうけ株式会社が解散かいさんしたあと、タケシはなんとなく元気がなかったのだ。だが六年生になると、またもとどおりになってきた。その原因げんいんはどうも新しい受け持ちの三宮先生らしい。始業式しぎようしきの日の帰り、タケシははりきっていたのだ。

「ぼくはなぜ勉強するのか、いっしょうけんめい考えるぞ」

教室の方からミツエとサブローがかけてきた。そうじ当番とうばんにあたっていた三組のこのふたりを、タケシたちは待っていたのだ。

「ヨシダ君はね、ソロバンじゆくに行かなくちゃいけないからってね」

と、ミツエはいった。サブローが目をくりくりさせる。

(a)

(b)

「三年のとき、やったじゃないか」

(c)

(d)

サブローも目を輝かがやかせた。

問一 ――線①～③の本文中における意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで答えなさい。

① 「くびをすくめた」

- ア 納得がいかず不審に思っている様子
- イ 自信が無く不安になった様子
- ウ 期待通りで喜んでいる様子
- エ 突然の出来事に怒った様子

② 「花の雲」

- ア 桜がまばらに咲いている様子が雲がふわふわとしているように見えるということ
- イ ピンク色の桜の花びらが夕日を受けた雲のように見えるということ。
- ウ 咲きかけの桜の様子が雲がうすく空にひろがった雲のようにみえるということ。
- エ 満開の桜の様子がもくもくとした雲のように見えるということ

③ 「まぜかえず」

- ア もう一度質問する
- イ 自分の意見を付け加える
- ウ ふざけて話を混乱させる
- エ 同じことをまた言う

問二 空欄 にあてはまる言葉として適切なものを、あとのア～エからそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

- ア でも
- イ ただ
- ウ だから
- エ それとも
- オ では

問三 (X)(Y)について、三宮先生が「立身出世」の下に書きくわえた言葉は何と何か。本文中よりそれぞれ九字でぬき出して答えなさい。

問四 ――線A「六年生の心がまえ」として担任の先生から生徒に考えてほしかったことは何か。本文中より十五字でぬき出して答えなさい。

問五 — 線B「二宮金次郎」が、勉強をしたのはなぜか、本文中の言葉を使って、五十五字以内で答えなさい。なお、解答には次の語句を必ず使用しなさい。

生活 好奇心

問六 — 線C「ケンヤク」の説明として最も適切なものをあとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア むだをなくして、お金がかからないようにすること。
- イ 病気や傷をおっていないく、精神的にも快適で満たされていること。
- ウ 仕事や勉強に対してせいっぱいはげむこと。
- エ 社会的に高い地位にいたり名声を得たりすること。

問七 本文から六年一組の生徒であることが分かる登場人物として適切なものを、あとのア～オから全て選び、記号で答えなさい。

- ア ヒデオ
- イ ミツエ
- ウ アキコ
- エ サブロー
- オ タケシ

問八 (a) (s) (d) に入るものとして最も適切なものをあとのア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「町のむかしといまをしらべるんだ」
- イ 「未来だつて?」
- ウ 「六年生には六年生のやり方があると、三宮先生はいったんだ。ついでに未来のこともしらべてこいっていわれたんだ」
- エ 「なんだい、またみんなでやろうというのはい」

問九 — 線D「それから二、三日」とあるが、三宮先生が二宮金次郎の話をしたのは、何の日であったと考えられるか。最も適切なものを、あとのア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 卒業式の日
- イ 入学式の日
- ウ 終業式の日
- エ 始業式の日